様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７７００４６

研究課題名（和文）東方アジアにおけるイスラーム美術の発展・受容・コレクション形成をめぐる基礎的研究

研究課題名（英文）Islamic Art in Southeast Asia: Its Development, Reception, and Collection

研究代表者
鎌田　由美子（KAMADA, Yumiko）

慶應義塾大学・経済学部・講師

研究者番号：７０６０９７６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　東南アジア地域で、イスラーム美術がいかに発展し、どのようなイスラーム美術品がコレクションされ、どのような意図のもとに展示されているのかを、初年度はブルネイにおいて調査し、2年目はジャカルタで調査した。ブルネイでのイスラーム美術展示には、「マレー・イスラーム王制」をかかげるイスラーム国家としてのブルネイを印象付ける目的があるようだった。一方インドネシアでは、展示において「イスラーム美術」というカテゴリーや表記が見られないが、それは、多民族・多文化のインドネシアで、特定の宗教に焦点を当てることが忌避されているからと考えられる。東方アジアのイスラーム美術について、シンポジウムを2度行った。

研究成果の概要（英文）：Islamic art in Southeast Asia had not been the focus of studies on Islamic art history for a long while. However, there has been growing interest in the subject in the last decade. Over the past two years, I visited Bandar Seri Begawan in Brunei and Jakarta in Indonesia to explore what kind of Islamic art objects were on public display and how they were exhibited. The Islamic art gallery in Brunei Museum was probably established to enhance the image of Brunei as a Malay-Islamic country. On the other hand, the museums in Jakarta do not apply the conventional category of “Islamic art” that has been developed in the field of art history in the West. This intentional absence of the concept of “Islamic art” seems to derive from the Indonesian government’s five official principles known as the Pancasila. Two seminars on Islamic art and culture in Southeast Asia and East Asia have been organized in the past two years.

研究分野：イスラーム美術史

キーワード：イスラーム美術史　東南アジア　展示

１．研究開始当初の背景

イスラーム美術は「ムスリムのために作られた美術、あるいはムスリムが作った美術」と定義される。学問分野としてのイスラーム美術は、19 世紀末期以降、西洋美術史の研究方法に基づき、考古学分野と連携しつつ発達した。イスラーム美術史は日本ではまだ十分に認知されていないが、欧米の大学教育では、すでに一般的な科目であり、アメリカの学部用の美術史の教科書（文献１）では、イスラーム美術史についても十分な解説がなされている。

イスラーム美術史研究のなかで中心的な位置を占める、北アフリカ、イベリア半島、アラビア半島、トルコ、イラン、中央アジア、インドのイスラーム美術・建築に関してはかなり研究が進み、その生成・進展の全体像を把握できるようになった。さらに、イスラーム美術品のコレクションが、どのようにして欧米各地に形成されてきたかについても研究がなされてきた。

しかしながら、東方アジア（東南アジアと中国、台湾、日本などの東アジアを指す）におけるイスラーム美術をめぐる諸相については、十分な研究が行われておらず、イスラーム美術史の基本研究書 *Islamic Art and Architecture 650-1250*（文献２）や *The Art and Architecture of Islam 1250-1800*（文献３）においても、項目がない。しかし、研究の必要性は認識されており、近年、*Crescent Moon*（文献４）と *The Message and the Monsoon*（文献５）などの研究書が出版された。そのほか、中国で西アジア向きに生産されたアラビア語銘文入り中国陶器や、乾隆帝の集めたムガル玉器など、個別の事例についての研究はあるものの、それらを、「東方アジアにおけるイスラーム美術」という観点から総合的に捉えた研究はない。

イスラーム美術史は、広大なイスラーム圏で生まれ発達してきた美術を対象とするため、東方アジアにおけるイスラーム美術の発展、受容、コレクション形成に関する本格的な研究は、イスラーム美術史研究にとって不可欠かつ重要な研究分野であり、貢献度も大きい分野である。さらに、昨今さかんに研究されている東南アジアの歴史・社会・文化について考察する際にも（文献６）、有益である。イスラーム美術史において「周縁」視されてきた東アジアにおけるイスラーム美術の諸相を総合的に研究することは、イスラームを共通項として通時的・広域的に見られるグローバルな要素と、地域に根差す美術伝統の要素がどう共存してきたのかを考察することでもあり、大きな意義がある。

文献１　Kleiner, Fred et al. *Gardner's Art through the Ages: Non-Western Perspectives*, Belmont, 2006.
文献２　Ettinghausen, Richard et al. *Islamic Art and Architecture 650-1250*, New Haven and London, 2001.
文献３　Balir, Sheila et al. *The Art and Architecture of Islam 1250-1800*, New Haven and London, 1995.
文献４　Bennett, James. *Crescent Moon: Islamic Art and Civilisation in Southeast Asia*, Adelaide, 2005.
文献５　Guise, Lucien. *The Message and the Monsoon: Islamic Art of Southeast Asia*, Kuala Lumpur, 2005.
文献６　Wade, Geoff. *Anthony Reid and the Study of the Southeast Asian Past*, Singapore, 2012.

２．研究の目的

イスラーム美術史研究は、西洋美術史研究の方法に立脚しつつ、学問分野として発展し、イスラーム時代のスペインから中央アジアにいたる地域のイスラーム美術が中心的に研究されてきた。一方、研究の必要性が認識されながら、十分な研究がなされておらず、今後の研究によって、イスラーム美術史研究に国際的に大きく寄与しうるのが、東方アジア（東アジアと東南アジア地域）におけるイスラーム美術をめぐる諸相についての研究である。本研究の目的は、東方アジア地域において、（１）イスラーム美術がどう発展したか、（２）イスラーム美術品がどのように受容されたのか、（３）いかにイスラーム美術品がコレクションされ、展示されてきたのかを明らかにすることである。

３．研究の方法

（１）美術館の収蔵カタログをはじめとする文献と実際の美術館調査から、東南アジア・東アジアに残るイスラーム美術品のデータを収集し、それを①陶器、金属器といったメディアごと②機能・意味ごと③商品あるいは贈答品といった流通の形態ごとに分類する。文献調査の一環としてマレーシア・イスラーム美術館の図書館を利用する。
（２）東南アジア、とくにブルネイとインドネシアのイスラーム美術を収蔵するコレクションを取り上げ、イスラーム美術品展示の特徴、意図、政治的・社会的背景について考察する。
（３）東南アジアにおける場合と、西欧における場合で、イスラーム美術の受容、コレクションの形成プロセス、展示方針において、どのような類似性あるいは差異が見られるのかを比較考察する。
（４）「東方アジアにおけるイスラーム美術」をめぐる国際セミナーとシンポジウムを開催し、周縁分野の研究者の発表を通じ、上記（１）－（３）の問題を考察・議論する。

４．研究成果

（１）ブルネイのイスラーム美術展示について

ブルネイ博物館は、政府のもとに 1965 年に組織され、1972 年に現在の建物が完成した。設立当初は、欧米の博物館学を摂取しようとしていた。1965 年から 70 年にかけて、国内外から所蔵品を収集し、1972 年に開館した当初は 1 階に「１．狩猟・漁業」「２．地質学と技術（主に石油採取の技術）」「３．自然史」、２階に「４．ブルネイの民族誌」「５．陶磁器ギャラリー」「６．村落生活」の合計６つのギャラリーから成り立っており、1969 年からは『ブルネイ博物館ジャーナル』ほか、ブルネイの歴史についてのモノグラフも出版された 。

1980 年代の『ブルネイ博物館ジャーナル』の内容を見る限り、順調に発掘・収集・研究がなされていたようである。その後、1990 年に、スルタン・ハサナル・ボルキアの 44 歳の誕生日を記念して、ブルネイ博物館にイスラーム美術ギャラリーが加えられ、スルタンの個人コレクションである 1500 点のイスラーム美術品が展示されている。

カタログも出版されているが、掲載作品の多くが 7 世紀から 19 世紀にイラン、イラク、シリア、インド、中央アジア、トルコ、北アフリカで制作された典型的なイスラーム美術品であり、欧米のイスラーム美術館にも収蔵されていることの多いものであり、地域的特性や独自性は見いだせない。作品は「写本芸術」「陶器」「金工品」「ガラス」「宝飾品」「コイン」「その他」に分類されて、メディアごとに概説が付されているものの、明代の陶製パネル１点しか含まれておらず、東南アジアのイスラーム美術に関する言及がほとんど見当たらない。

1990 年に開設したイスラーム美術ギャラリーには以後、あまり手がかけられてないようだが、考古学など、ブルネイ博物館の他のセクションは近年でも収集・研究・出版を行っているようで、2003 年にはブルネイの墓碑・石碑についてのモノグラフが出されているほか、2002 年と 2010 年にはブルネイ博物館が収集した金工品のカタログも出版されている。これらのなかには、イスラーム美術史の観点から興味深いものもあり、ブルネイから出土した、アラビア文字文の付された元代・明代の陶磁器の破片と合わせて、ブルネイにおけるイスラーム美術の事例として展示することが可能である。また、イスラーム美術ギャラリーには、他の美術品に紛れて目立たないが、中国で制作されたアラビア語銘文入りの金属製の花瓶やエナメル装飾された香炉セット、イランのカージャール朝宮廷用に作られたヒジュラ暦 1297 年（西暦 1879/1880 年）とヒジュラ暦 1301 年（西暦 1883/1884 年）の年記入りの中国陶器などもあった。

（２）インドネシアのイスラーム美術展示について

ジャカルタ国立博物館は、東南アジアでも有数の規模と歴史を誇る美術館で、インドネシア各地から集められたさまざまなものが展示されている。前身のバタヴィア学術協会の時代から現在にいたるまで、コレクションは増え続けており、2007 年に新館を建設して展示スペースを広げ、現在では約 14 万 2000 点を所蔵している。展示されていた魔除けとして使用された木製壁掛けのなかには、中国的な風景の中央に「アッラー」「ムハンマド」と銘文を入れ、その隣にはヒンドゥー教の神であるガネーシャを彫ったものがあった。インドネシアの宗教と文化の重層性を明確に示したものであり、こうした作品をアラビア文字が彫りこまれていることを理由にイスラーム美術として扱うことがどれほど有効かは疑問である。興味深いことに、イスラーム時代の東南アジアで制作されたテキスタイルや陶器などの展示においても「イスラーム美術ギャラリー」などのような、イスラーム美術に特化した展示コーナーは設置されていなかった。

（３）欧米のイスラーム美術展示と東南アジアにおけるイスラーム美術展示の違い

欧米ではここ 10 年の間に、イギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、アメリカのメトロポリタン美術館、フランスのルーヴル美術館などが次々とイスラーム美術ギャラリーを改修・拡大し、より一層充実したイスラーム美術展示を行っている。そこでは、あくまでも西洋美術史の方法に立脚し、博物館学の成果も反映しながら、コレクション形成と教育、研究を目的とした展示が行われている。

ブルネイと同じく、東南アジアに位置するマレーシア・イスラーム美術館(IAMM)やシンガポールのアジア文明博物館(ACM)におけるイスラーム美術展示は、それらに規模は及ばないものの、欧米で発達したイスラーム美術史学と博物館学の成果を取り入れ、そのうえで東南アジア・東アジアのイスラーム美術にも焦点を当てることで独自性を打ち出しており、特別展を含む展示や出版物を通じての教育・研究活動や設備の面では引けを取っていない。それに対し、ブルネイ博物館のイスラーム美術展示にあまり手が入れられていないのは、学術的な関心よりも、「マレー・イスラーム王制」を掲げるイスラーム国家としてのブルネイを印象付ける機能が重視されているからだと考えられる。他方、インドネシアの美術館や博物館に「イスラーム美術」という概念が導入されていないのは、国民の 9 割がムスリムとはいえ、ほかの宗教を信じる人々や、土着の信仰を守る人々もいる

インドネシアにおいて、イスラーム美術に焦点を当てることは、別の宗教を信じる人々を軽視しているともとられかねず、多民族・多文化のインドネシアで、特定の宗教に焦点を当てることへの忌避があると考えられる。

インドネシア政府がかかげるモットーは、「多様性のなかの統一」であり、唯一神への信仰、人道主義、民族主義、民主主義、社会正義を掲げた五原則、パンチャシラである。インドネシア最大のモスク、イスティクラル・モスクとカテドラルが隣接して建設されているところにも、正式に認めている五つの宗教（イスラーム、カトリック、プロテスタント、ヒンドゥー、仏教、さらに近年は儒教）を共存させようとする政府の意図が感じられるが、博物館行政にも同様の姿勢が見られた。

(4) 本研究テーマにについて、2014 年 2 月に早稲田大学で国際セミナー「イスラーム美術コレクションの形成―ヨーロッパ、アメリカ、エジプト、アジア」を開催し、真道洋子氏（早稲田大学イスラーム地域研究機構）に「カイロ・イスラーム芸術博物館の歴史と現状」について、ウォルター・デニー教授（マサチューセッツ大学）に「イスラーム美術と西洋」についてご発表いただき、報告者自身は「東南アジアにおけるイスラーム美術コレクション」について発表し、それぞれを比較検討する場を持った。

また、2014 年 11 月には、慶應義塾大学で「東方アジアにおけるイスラームの諸相―思想・美術・コレクション」と題するシンポジウムを開催し、中西竜也氏（京都大学白眉センター）には中国ムスリムについて、髙橋三和子氏（慶應義塾大学）には初期近代ヨーロッパにおける珍品蒐集について、神田惟氏（オックスフォード大学）に日本におけるイスラーム陶器蒐集についてお話しいただき、報告者自身は、インドネシアにおけるイスラーム美術展示の特徴について報告し、関連する様々な分野の研究者が意見交換する場を持った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① Kamada, Yumiko. “Exhibiting Islamic Art Objects in Museums in Jakarta, Indonesia” *WIAS Research Bulletin* 7 (2015), pp. 71-77. （調査報告、査読無）

② 鎌田由美子「ブルネイ博物館におけるイスラーム美術展示」『早稲田大学高等研究所紀要』6 (2014), pp. 99-106. （調査報告、査読無）

〔学会発表〕（計２件）

① 鎌田由美子「東南アジアにおける『イスラーム美術』展示―インドネシアを中心に」　シンポジウム「東南アジアにおけるイスラームの諸相―思想・美術・コレクション」於慶應義塾大学日吉キャンパス（横浜市）、2014 年 11 月 9 日

② Yumiko Kamada, “Islamic Art Collections in Southeast Asia” WIAS International Seminar: Collecting Islamic Art in the West, Egypt, and Asia, Waseda University（東京都）, Feb. 18, 2014.

６．研究組織

(1)研究代表者

鎌田　由美子（KAMADA, Yumiko）
慶應義塾大学・経済学部・専任講師
研究者番号：70609768